

保育現場におけるギフテッドの現状と支援に関わる基礎的研究

—保育者のギフテッドに対する認識について—

Basic Research on the Situation and Support for Intellectual Giftedness in Nursery Schools

— Childcare Workers' Awareness of Intellectual Giftedness —

福井逸子

要旨

近年、保育現場では、発達の特徴が様々に異なる子ども達が顕在化してきている。その中で、ギフテッドと呼ばれる生まれつき高度な知的能力を兼ね備えている子どもについては、ほとんど周知されておらず、保育集団の中に埋もれているのが現状である。

しかしながら、保育者は、集団の中でのマイノリティな子ども達の存在にも目を向け、その子自身が過ごしやすい環境を導き出すための手立てを講じていく責務がある。本研究は、保育現場におけるギフテッドの実態を把握するための調査を行い、そこから導き出される課題を検討した上で、ギフテッドに対する保育の支援策を講じることを最終的な目的としている。

その第一段階として、本誌では、2022年9月に全国の7市町村で実施した保育者を対象とした自記式質問紙調査の分析結果の中で、「保育者のギフテッドに対する認識」に着目したい。特筆すべき点は、ギフテッドという言葉を知っている保育者は、全体の40.9%いるものの、日本のギフテッドの現状を知っている保育者は、6.3%と希少であった。また、現在までに担当した子ども達の中にギフテッドがいると答えた保育者は、全体の26%であり、ギフテッドはいない、もしくは分からないと答えた保育者は、74%であった。さらに、保育者のギフテッドについての捉え方については、「高度な能力、知的能力の高い子ども」であるとイメージしている意見と「イメージがつかない、分からない」といった対比的な意見が見られた。今後の保育現場における対応策としては、ギフテッド自身に対する個別の支援の重要性について言及する意見も多く見られた。

キーワード：保育現場、ギフテッド、認識、マイノリティ、自記式質問票調査

1. はじめに

昨今、ギフテッドという言葉は、メディア等でも見聞きする機会は増えてきているものの、未だ、明確な定義は存在していないのが現状である。ギフテッドは、英語のGiftedという単語から由来されており、「天から与えられた特別な才能を持つ人」等と捉えられているが、日本では、「英才児」と示されている場合もある。一方、アメリカ連邦政府初等中等教育局では、

「知的・創造的・リーダーシップ能力などの分野、または特定の学問分野で高い達成能力の証拠を示し、それらの能力を完全に開花するため学校が通常提供しないサービスや活動を必要とする学生、子ども、または若者」と定義されており、⁽¹⁾ 全米ギフテッド協会 (National Association for Gifted Children) が2016年に行った調査では、学齢期の子ども達の6～10%に当たる300～500万人の子ども達が、ギフテッドであると推定している。

しかしながら、日本では、同様の調査は行われておらず、ギフテッドの認知度は非常に低く、発達障害の枠のなかに無理やり押し込められることも多い事が推測される。角谷⁽²⁾によれば、「ギフテッド児は、その優れた特性ゆえに支援を受けにくい状況にあり、彼らの困難は、その優れた特性ゆえに生じており、本来支援を要する部分が誤解され、様々な障害の誤診を受けるケースがある」と報告されている。同様に、林⁽³⁾は、「ギフテッドの子どもは、語彙や認知能力等が周りの子どもたちよりもはるかに発達している一方、精神面や社会面が弱い傾向にあるため、同年代の子どもに溶け込みにくく、学校の理解を得られなかったり、不登校になったりすることもしばしば見られる」と言及している。また、小泉⁽⁴⁾は、「知的ギフテッドを持つ子どもたちは、個々のニーズに応じた教育的支援が学校で受けられないために充足感がなかなか得られず、クラスや地域などのコミュニティーなどでも受け入れにくさから疎外感を抱えてしまう」と述べ、ギフテッドの持つ優れた知能や創造性が生かされないまま自尊心の低下は、二次障害へと繋がっていく危険性を招くことを指摘している。他方、小林⁽⁵⁾は、「日本において高知能の子どもや成人に対しギフテッドと称するのは、ある種のカテゴリと個人の特性化にともなうラベリングに留まらない」ことを危惧しており、Giftedをそのままカタカナに書き下して「ギフテッド」という用語を使用することについて問題視している。

このように、ギフテッドの明確な定義や指標、支援の在り方が確立されていない中、文部科学省は、2021年8月～9月にかけて、全国の小学校から高等学校の保護者、学校の教師、支援団体の職員等を対象とした「特定分野に特異な才能のある児童・生徒に関するアンケート調査」⁽⁶⁾を実施した。このアンケート調査においては、ギフテッドという言葉は使われておらず、「特定分野に特異な才能のある児童・生徒」という言葉を用いている。これは、同年齢の児童生徒の中で、知能や創造性、芸術、運動、特定の学問の能力（教科ごとの学力）等において一定以上の能力を示す者とされ、ここには、特異な才能と学習困難を合わせ有するいわゆる2E (twice-exceptional) の児童生徒等も対象に含めている。また、このアンケートの実施に関する目的を文部科学省は、「特定分野に特異な才能のある児童・生徒の情報等を得て、その指導・支援の在り方等に関する具体的な検討に資することである」と提言しており、アンケートの実施後、現在まで14回の有識者会議（2022年9月現在）がweb上で開催されている。

しかしながら、上記の調査結果を見ると、回答者の約8割に当たる663人が保護者であり、支援団体や教師からの回答は希少となっており、学校現場における特異な才能のある児童生徒の実態を掴むことはやや難しいようにも思われる。そこで、筆者の研究では、アンケート調査

の対象者を就学前期の保育者に定めることで、保育現場におけるギフテッドの現状を把握し、そこから導き出される課題を検討した上で、今後のギフテッドに対する保育の支援策を講じることを目的として実施したい。尚、本研究における保育者とは、幼稚園、保育所、認定こども園に勤めている者全てを対象としている。さらに、本研究は、ギフテッド自身の存在を保育現場にも広く知らせていく役割を担っていくものであり、保育現場と小学校との接続が重要視されている今日、保育現場において、ギフテッドを取り巻く保育のあり方を模索していくことは、今後、小学校以降の就学に向けた切れ目のない支援を行う上で、重要な役割を担うと考える。

2. 研究方法

(1) 研究デザイン

自記式質問紙による実態調査研究

(2) 対象

機縁法より選出した全国の7市町（中部・北陸、近畿、九州・沖縄）の保育現場に勤める保育者

(3) 調査機関

2022年9月1日～9月30日

(4) 調査方法

筆者の先行研究⁽⁷⁾び、前掲の「特定分野に特異な才能のある児童生徒」⁽⁶⁾に対するアンケート（文部科学省）を参考に独自に作成した無記名式自記式質問紙を用いて、web上にて行った。調査に先立ち、機縁法に基づき選出した全国7市町の保育現場の所在地にある、教育委員会、子ども家庭局等（各市町村の保育所・認定こども園の窓口は、子ども課、子育て支援課等、名称が多岐に渡る）の担当者に事前に電話で本研究の概要を伝えた上で、研究に対して同意が得られた役所の窓口を直接訪問し、詳細な研究内容を伝えた。同時に各市町村の教育長、局長（課長）宛に正式な依頼状を発送した。その後、各市町村の担当者より管轄内の保育現場の所属長宛に本研究の協力依頼文書が発信された。本調査はweb上で行ったため、調査開始初日に、各市町村の担当者を通して、URL及びQRコードの添付された説明書が各保育現場に配信された。

(5) 調査内容

調査内容は、対象者の施設内の役割・立場、居住地、性別、年代、勤務年数、現在の担当クラス、保有資格等回答者自身の属性に関する項目、ギフテッドという言葉の認識、ギフテッドを知るきっかけとなったもの、日本のギフテッドの現状と国内のギフテッドに関する取組についての認識、現在までにギフテッドを担当したかの有無と当該児について気になり始めたきっかけや気づいた後の園内での対応についての項目は、選択式の回答を求めた。

また、実際にギフテッドを担当した保育者からは、自身が行った援助や配慮、当該児と関

わった期間や他児との関わりの様子、必要であると思われた支援策について、一方、ギフテッドを担当したことがない・分からないと回答した保育者からは、ギフテッドについてのイメージ、当該児に対する支援策や保育についての考え方、さらに、全回答者に保育現場で必要となるギフテッドへの支援策と今後、国や地域、専門機関に期待することを自由記述の回答で求めた。最終的には、調査項目は合計27項目となったが、回答者が本調査に要する時間は概ね10分程度であった。本調査紙の質問項目の妥当性については、事前に障害児教育を専門とする研究者・医療関係者と十分な検討を行った上で作成した。

なお、本稿においては、誌面の都合により、質問内容の中から選択式の回答の一部とギフテッドを担当したことがない、分からないと回答した保育者を対象とした、ギフテッドに対するイメージや保育の中での考え方についての自由記述の項目のみを選出し、分析・考察した結果を記載する。

(6) 分析方法

回答者の属性等選択式のデータ結果は全て数値化し、Excelシートに度数や割合なども記載した上で、グラフや表の作成を行った。また、役割や立場、年代の属性とギフテッドについての認識については、SPSS Statistics Ver.26を使用して、割合比較のために χ^2 検定を行った。自由記述回答では、Text Voices Ver.5.00を用いて、テキストマイニングの手法で分析した。ここでは、電子テキスト化された記述文をピース（単語）のような最小単位に分解し、本データで重要なピースのグループのリストを作成した。その中から本稿では、フォーカスとバースペクティブのみを取り上げる。

(7) 倫理的配慮

本研究への協力は自由であり、回答の有無により不利益を被ることはないこと、途中の中断も可能であることを事前に伝えた。回答は、無記名として、個人の回答が特定されないようにした。また本研究で得た全てのデータについては、web上にて実施するため、URL (QRコード)の発行と掲載等その後の管理等を専門の会社を通して行い、漏洩、盗難等が起こらないように細心の注意を払った。なお、本研究は、親和女子大学倫理審査委員会の承認を受け、その内容を遵守して行った。

3. 結果

(1) 回答者の属性

本調査の回答数は、全国7市町より367名から得られた。本調査において、極端に回答数が少ないものや回答に欠損のあるものは見当たらなかったため、有効回答率は100%とし、367名を分析対象者とした。なお、回答者は、男性11名(3.0%)、女性355名(96.7%)であった。

対象者の年齢は、20歳代77名(21.0%)、30歳代78名(21.3%)、40歳代108名(29.4%)、50歳代78名(21.3%)、60歳代26名(7.1%)の5群に分類した。(図1参照)

対象者の役職については、園長・所長57名(15.5%)、教頭・副園長・副所長22名(6.6%)、主幹教諭・主任保育士42名(11.4%)、常勤教諭・保育士178名(48.5%)、非常勤教諭・保育士49名(13.4%)、その他19名(5.2%)であった。(図2参照)

対象者の現在の施設での勤務年数367名中、最少期間の0ヶ月から最大期間の44.11年、平均勤務年数は、15.6±1.6年であった。

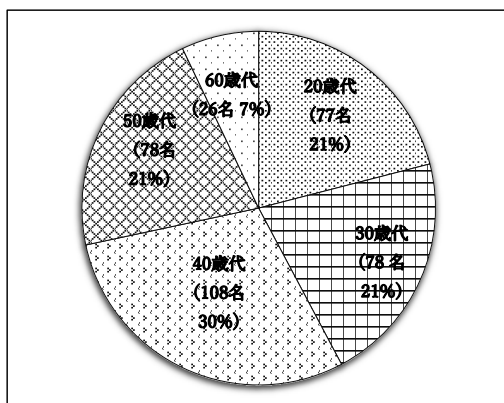


図1：回答者の年代 (N=367)

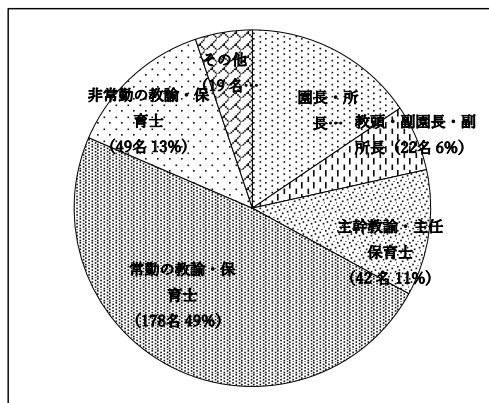
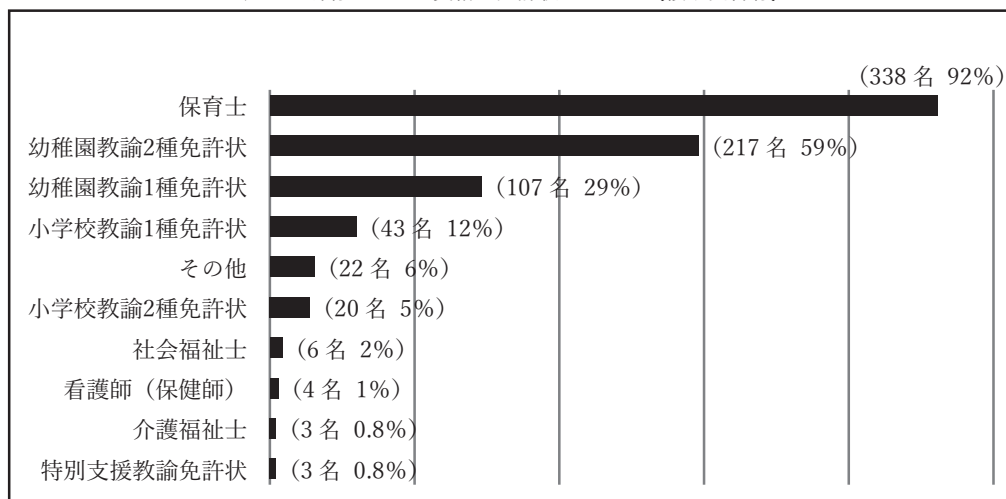


図2：回答者の施設内での役割・立場 (N=367)

また、現在の担当クラスは、0、1、2歳児の未満児クラスは、118名(32.1%)、3、4、5歳児の3歳以上の幼児対象のクラスは、106名(28.9%)、フリーの担当者は、41名(11.2%)、その他は、102名(27.8%)であった。今回の調査では、7市町全て公立の幼稚園、保育所、認定こども園を対象として実施されたため、教育委員会や役所勤務の教諭や保育士が多かったことが推測され、その他が多い結果となった。

対象者の免許・資格の保有については、保育士資格を有しているものが92.1%と最も多く、次いで幼稚園教諭二種免許状の取得者が59.1%、幼稚園教諭一種免許状取得者が、29.2%であった。昨今、全国的に認定こども園への移行が進んでいる中、保育士資格及び幼稚園教諭の免許状が必須となっているため、複数の資格、免許状の保有者が多く見られた。(表1参照)

表1：所有している資格・免許状について（複数回答有）



（2）ギフテッドという言葉についての認識

本調査内で「ギフテッドという言葉について知っていますか」という質問に対しては、367名の回答者中、「知っている」と回答した保育者は、41%であり、「知らない」と回答した保育者は、59.1%であった。この結果から、半数以上の保育者は、ギフテッドという言葉についての認識していないことが明らかとなった。（図3参照）また、「知っている」と答えた保育者から、ギフテッドについて知るきっかけとなったものについて、選択式の質問を行ったところ、半数以上（58.7%）の保育者が「ニュース番組やメディアを通して」という項目を選択しており、「ギフテッド」に関する多くの報道が流布している現状が垣間見られた。（表2参照）

他方、367名の回答者の中で「日本のギフテッドの現状について知っている」保育者は、僅か6%にすぎなかった（図4）知っていると答えた保育者の中では、2014年から東京大学先端科学技術研究センターで取り組まれている「異才児発掘プロジェクト」や2017年に東京都渋谷区で行われた日本初の公立学校におけるギフテッド教育の取組を選択している回答が多く見られた。

さらに、ギフテッドという言葉についての認識を年代別及び施設内での役割・立場のそれぞれの属性に合わせて、SPSS Statistics Ver.26を使用して、割合比較を行い、 χ^2 検定を基にクロス集計表を作成した。（表2・表3参照）年代別に捉えた「ギフテッド」という言葉の認識については、Pearsonの相関係数が1%水準となっており、5群に分けられた各年代とギフテッドという言葉について知っている、知らないという認識の差は特には生じていないことが分かった。同じく、施設内での役割・立場別から捉えた「ギフテッド」という言葉の認識についても、Pearsonの相関係数が1%水準となっており、現在の役割・立場とギフテッドという言葉の認識における謙虚な差は見られなかった。

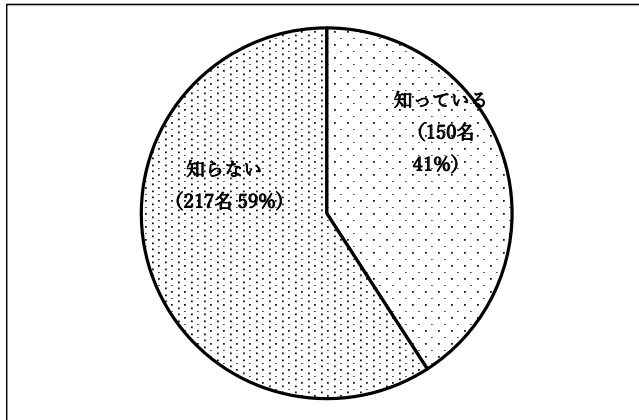
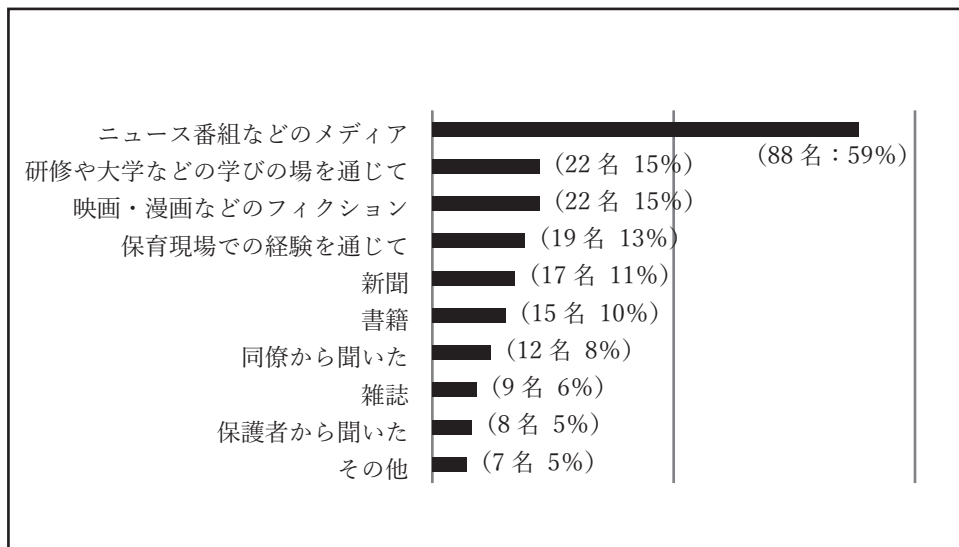


図3：ギフテッドという言葉についての認識 (N=367)

表2 ギフテッドを知ったきっかけについて (N=150)



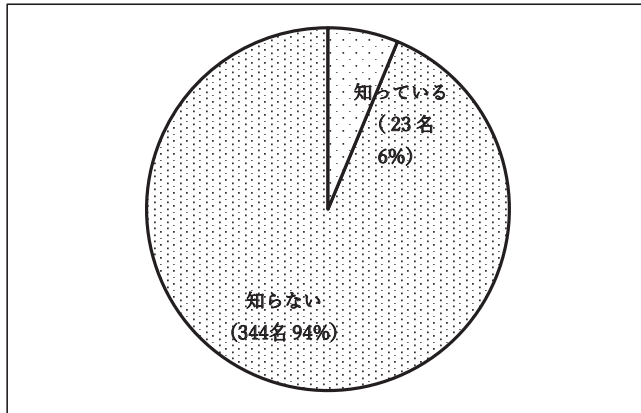
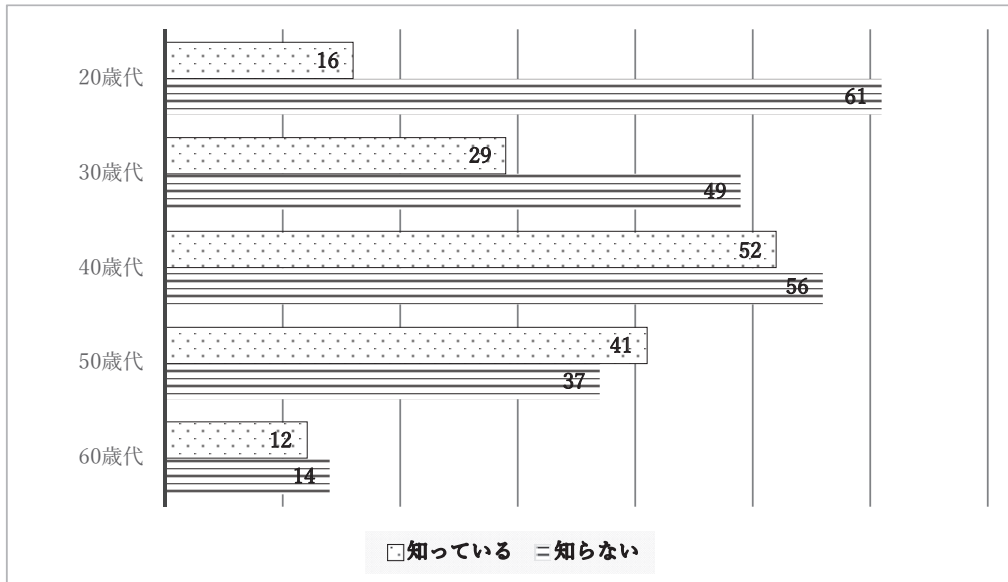


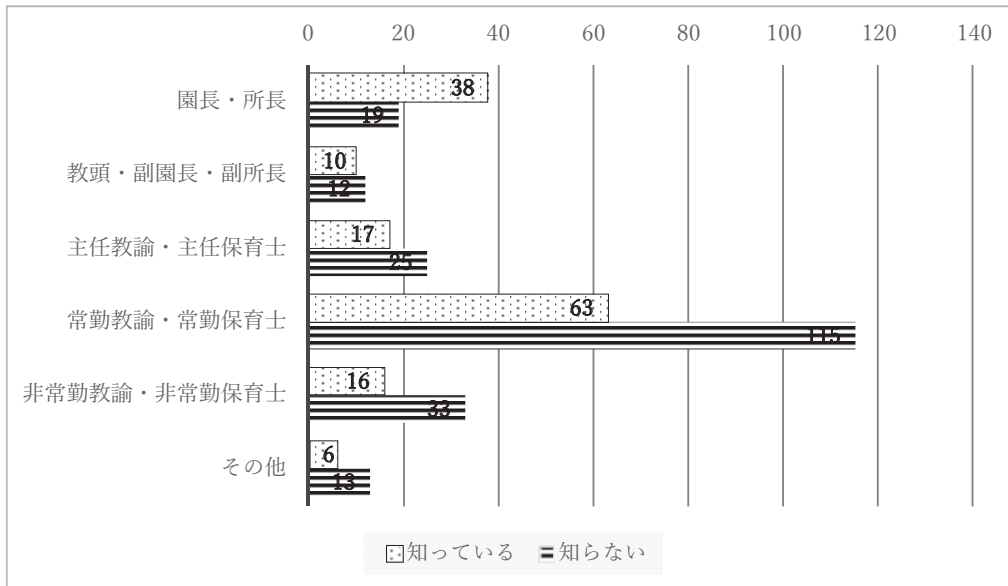
図4：日本のギフテッドの取組についての理解

表2 年代別に捉えた「ギフテッド」という言葉の認識について



注：Pearson の相関係数 = .209 相関係数は 1%水準

表3 役割・立場別から捉えた「ギフテッド」という言葉の認識について



注：Pearson の相関係数 = .216 相関係数は 1%水準

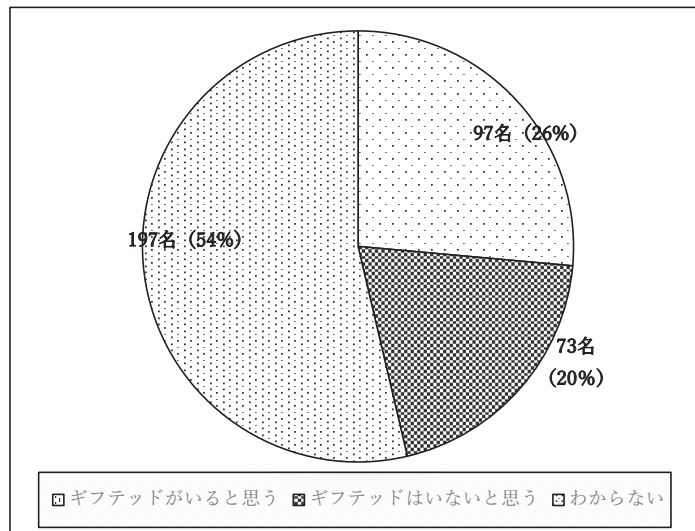


図5 担当児におけるギフテッドの有無について

(3) ギフテッドについての捉え方

続いて、本調査内で「あなたはこれまでに（現在も含めて）担当した子ども達の中にギフテッドはいると思いますか」という質問に対しては、367名の回答者中、「ギフテッドがいると思う」と回答した保育者は、26%であり、「ギフテッドはいないと思う」と回答した保育者は、20%であり、「分からない」と回答した保育者は、54%であった。（図5参照）

この結果から、全体の約7割以上が、ギフテッドの存在には気がつかなかった、または、日々の保育の中で特段意識はしていなかったかということが推測される。

そこで、「ギフテッドがないと思う」と「分からない」と答えた保育者270名を対象として、「自身で捉えたギフテッドのイメージと、当該児に対してどのような支援が必要であると思うか」というギフテッドへの保育に関する各自の考えを自由記述による回答から求めた。この結果については、Text Voice s Ver.5.00を用いて、テキストマイニングの手法で分析した。具体的には、回答者の自由記述（テキストデータ）の中で、どのようなキーワードが多く出て、相互に関連しているかを分析するための手法であり、「ギフテッドのイメージ、当該児への支援策等」の意見を集約・分析した後、抽出語間の関係や強弱を表す「ワードクラウド」等の図を作成して、頻出度合いや関係性を見える化した。本稿では、誌面の都合により、フォーカスとバースペクティブのみを取り上げる。（図6・図7参照）

先ず、フォーカス（図6）であるが、ここでは、横軸の出現量と縦軸の結束度（グループ内でのつながりの強さを数値化）の2つの値で算出されている。右上部分は、出現量も多く結束度も高く、注目されやすい意見群がプロットされている一方で、左上の部分は、出現量は少ないけれど結束度が高くなっており、一定の保育者から強く述べられている意見と捉えることができる。そこで、この左上の意見に注目してみたい。ここでは、「困り感、考えられる、孤立、整える」という言葉が含まれた、記述（生データ）を拾い上げた。その中で代表的な意見として、「普段生活していて、物足りなさを感じて孤立してしまう事が考えられるので、その子に合った遊びなど準備してあげたら良いかな…」、「並はずれた能力を持っていることが考えられるため、まずは普段の遊びの中でその子の得意な分野について知り、それを十分に伸ばすことのできる環境を整えたい」（原文のまま）といった、肯定的な意見が見られ、ギフテッド自身が孤立して困り感を抱かないためにも、その子自身が十分に能力を発揮できるような環境を考えていくことが重要であることが読み取れた。また、「やりたい、とことん、時間、興味、整える」という言葉が含まれた記述（生データ）からは、「その子のやりたいことや興味のあることが十分に実現できる環境を整える」「興味があることをとことんできる環境と時間を整えてあげられると良い」「その子がその子らしくやりたいことをとことん追求できる環境が必要」（原文のまま）等の意見が複数見られ、ギフテッド自身を視座に捉えた環境の必要性が強調されていた。その中でも、「高度な知識を持っているため、その子に応じた興味の幅で環境を整える（本など）また、あまり集団活動にしぼりのない活動をする」といった具体的な保育環境を提案する意見も見られた。

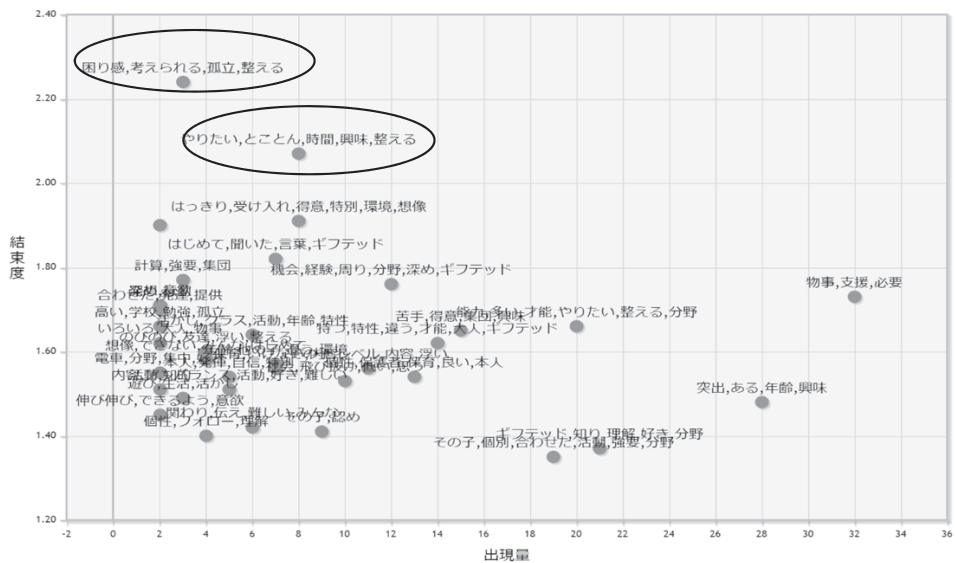


図6：フォーカス図（結束度の高い、要注目度の意見を抽出）

注：出現量は少ないが結束度の左上の意見に注目

次に、バースペクティブは、(図7)は、テキストに潜在する大きなパターンを読み解くためにマッピングされた図である。ここでは配置の位置関係から、近くに配置された内容は、背景に共通の動機や意味があると解釈し、反対に遠くに配置された内容には対立する軸、意味が隠れていると解釈し、各々にどのような共通要因があるのかを各記述（生データ）を基に読み解いた。筆者の分析した結果は、保育者が持つギフトッドの言葉のイメージとして、「他の子どもとは異なる優れた才能を持つ子ども」「飛び抜けた能力を持っている子ども」等特別視するような捉え方をしている回答が多く見られた。その中でも一部の保育者は、「集団の中では、社会性に欠ける一面も持ち合わせている」というイメージで促えている回答も見られた。

また、それに対比する意見としては、「ギフトッドという言葉は始めて聞いた」「ギフトッドへの想像、判別などは難しくて分からない」という意見が多くの保育者から挙げられた。同様に「ギフトッドは、アンバランスさがあり、周囲との関わりが困難である」「集団の中では、他児との関わりが難しい」等のギフトッドに対する。困難感を示す保育者も一定数存在していた。

他方、本調査の中で、現在までに担当した子ども達の中にギフテッドがいると答えた保育者は、全体の3割未満であり、ギフテッドはいない、もしくは分からないと答えた保育者は、7割であった。本稿では、この7割に当たる保育者を対象として、ギフテッドに関する考えを徴集したが、「高度な能力、知的能力の高い子ども」であるとイメージしている意見が挙げられる一方で、「全くギフテッドについてのイメージがわからない、分からない」等の意見も一定数以上見られ、ギフテッドに関しては、肯定的に捉える意見と困難感や疑問視するような対比的な意見が浮かび上がった。一方、保育現場において、ギフテッド自身に対する個別の支援の重要性について言及する意見も多く見られ、今後、日々の保育の中で、ギフテッドの存在に目を向けていかなければいけないという思いが保育者自身からも伝わってきたように感じている。

今後の課題として、アメリカでギフテッド教育について発信しているポーター氏⁽¹⁰⁾は、「生まれつきの能力差が存在しないという教育観が強い日本の場合、ギフテッドの概念自体が受け入れにくく、むしろ早期教育として波及することに懸念を持つ教育関係者もいることであろう」と日本のギフテッド教育について警鐘を鳴らしている。アメリカでは、高い知能ゆえに、通常のカリキュラムでは、退屈で適応できず学業不振に陥るといった学習ニーズに加え、ギフテッドの持つ生活面のニーズに対するカウンセリングの必要性についても報告されている。⁽¹⁾アメリカと同様に日本の中でも、今後はギフテッド教育の必要性を確認し、子どもたち一人一人の才能や能力を活かしていくことが期待されている。これについては、現行の教育・保育のガイドライン（平成29年度版「幼稚園教育要領」「保育所 保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」）が強調している一人一人の子どもを丁寧に見つめていく保育者の姿勢にも繋がっていると考えられる。

本調査は、保育者自身がギフテッドについて認識しているのかその実態を把握することを目的として行ったが、第二段階では、「就学前期に、ギフテッドの特性に応じた保育支援を行うことは、当該児にとっても、その後の学習や生活環境においても有効ではないだろうか」という学術的な問いに答えるために、直接、保育現場に参入して、ギフテッドとの関りを持っている（過去に持っていた）保育者を中心に、インタビューを行いながら、ギフテッドに対する課題の検討を行うための基礎的データを集積していきたい。そしてギフテッドに対するより良い支援のあり方を探っていく方針である。

研究の限界

本研究の対象は、全国7市町にある幼稚園、保育所、認定こども園の一部の保育者のみを対象として行った調査であり、その結果を一般化するには限界がある。また、保育者自身の個々の思いを探究するためには、自由記述におけるさらなる内容分析も必要となる。

付記：本研究は、科研費助成事業（若手研究）「保育現場におけるギフテッドの現状と支援に関わる基礎的研究」課題番号2 IKI3564を基に行っているものである。

参考・引用文献

- (1) Webb, N. E., Kuzujanakis, M., Olenchak, F. R., & Goerss, J. (2016). *Misdiagnosis and Dual Diagnoses of Gifted Children and Adults: ADHD, Bipolar, OCD, Asperger's, Depression, and Other Disorders* (2nd Edition). Great Potential Press
(角谷詩織・榊原洋一監訳 (2019) 『ギフトッドその誤診と重複診断：心理・医療・教育の現場から』北大路書房)
- (2) 角谷詩織 (2018) 「ギフトッド児の誤診を防ぐ：その理解と、適した環境の必要性」チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/249.html>
- (3) 林 睦 (2017) 「ギフトッドの概念と日本における教育の可能性」滋賀大学教育学部紀要, 第67巻, pp199-204.
- (4) 小泉雅彦 (2016) 「認知機能にアンバランスを抱えるこどもの「生きづらさ」と教育：WISC-IVで高い一般知的能力指標を示す知的ギフトッド群」北海道大学大学院教育学研究院紀要, 124, pp145-151.
- (5) 小林 茂 (2021) 「日本におけるgiftedという語の受容の課題」札幌学院大学心理学紀要 第3巻第2号, pp1-11
- (6) 文部科学省 (2022・12月7日) 「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」
- (7) 橋本 (福井) 逸子・木村留美子 (2015) 「保育所における『気になる子ども』の研究－保護者への対応について－」金沢大学つるま保健学会誌 第29巻1号, pp101-108
- (8) James T Webb, Janet L. Gore, Edward R. Amend, Arlene R. Devries 『A PARENT'S GUIDE TO GIFTED CHILDREN』(2019) (角谷詩織訳『わが子がギフトッドかもしれないと思ったら』春明社)
- (9) 読売新聞オンライン記 (2022年8月27日付) 「『ギフトッド』の子どもを文科省が支援へー特定分野への並外れた才能、学校生活になじめないケースも」
- (10) ポーター倫子 (2011) 「アメリカのギフトッド教育事情」チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/130.html>